

# 藤原不比等論

## 第3章 藤原不比等の生い立ちと経歴

### 第1節 生い立ち

#### 1、田辺史大隅（たなべふひとおおすみ）

藤原不比等は、百済系渡来人の 田辺史大隅に育てられた。田辺史大隅ならびにその一族は百済系渡来人なるがゆえに、大陸文化に明るく、学識も豊かであったようだ。また、田辺史大隅は、中臣鎌足の期待に応え、藤原不比等を学識だけでなく人格的にも立派な人間になるように、理想的な育て方をしていったと思われる。藤原不比等は、その少年時代、藤原史（ふひと）と呼ばれていたが、田辺史大隅は彼を自分の子供のように思い、また彼も田辺史大隅を実質的な父親のように思っていたのではなかろうか。

中臣鎌足は、中臣鎌足は改新に力を尽くし、近江朝廷における最高の実力者となったが、その近江朝廷に近く、当時から交通の要衝とされていた山科に「陶原の館(すえはらのやかた)」と呼ばれる邸宅を建てたと伝えられている。その邸宅には山階精舎(やましなのしようじゃ)と呼ばれるお堂がつくられ、ここに釈迦像が安置されて山階寺とも呼ばれるようになった。その山階寺跡と思われるところに、現在、碑が建っていて、中臣鎌足の邸宅の近くに田辺史大隅らの家があったと説明されている。



その説明文は次の通りである。

山階寺は七世紀後半、藤原鎌足により創建された寺院です。鎌足の「山階陶原家付属の持仏堂」が始まりと推定されます。

奈良時代の興福寺に関する史料（『興福寺流記』所引「宝字記」）には、「鎌足は改新の成功を祈って、釈迦三尊像・四天王像を造ることを発願した。事が成就した後、山階の地で造像を行った。やがて重病になり、妻の鏡女王の勧めで伽藍を建て仏像を安置した。これが山階寺の始まりである」と記されています。

その所在地は大宅廃寺説や中臣遺跡説もあるが、山科駅西南、御陵大津畑町を中心とした地域にあったとする説が有力です。付近から有力な遺跡は見つかっていませんが、この辺りは大槻里と呼ばれ、西隣の陶田里にかけてが陶原であったと推定されています。鎌足の子の不比等が育った「山科の田辺史大隅らの家」も近くにありました。

山階寺はその後、藤原京に移り厩坂寺と呼ばれ、更に平城京に移り興福寺となります。このため興福寺は当初山階寺とも呼ばれました。天智天皇の腹心であり、藤原氏の始祖となる鎌足は、山科と深い関係があったのです。

なお、ちなみに、この説明文に出てくる鏡女王のことであるが、彼女は、はじめ天智天皇の妃だったが、後に中臣鎌足の正妻となっただけではない。しかし、中臣鎌足には二人の妻がいて、藤原不比等の母親については、ウィキペディアには与志古娘と書かれているが、鏡女王は鎌足の正妻になったのだから、不比等の実の母親に違いないという説もある。

『万葉集』には鏡女王の四首の歌が収録されている。天智天皇・額田王・藤原鎌足との、歌の問答が残されている。「神奈備乃伊波瀬乃社之喚子鳥痛莫鳴吾戀益」という歌は、「神奈備の石瀬の社の呼子鳥よ、そんなに激しく鳴かないでおくれ。私の恋しい思いが募るばかりだから」という意味である。この歌は、鏡女王が鎌足の死後、彼を思って作った歌だという説がある。

なお現在、墓所に比定されているのは奈良県桜井市にある小墳丘で、舒明天皇陵の敷地内にあり、鏡女王は舒明天皇の娘であるという説がある。

鏡女王は、謎に包まれているが、歌が上手く、美しい人であったらしい。私は藤原不比等の実の母親だという思いがしてならない。



鏡女王

( <https://blogs.yahoo.co.jp/sofashiroihana/12120542.html> による)

仮に鏡女王が藤原不比等の実の母親だとしても、実は、不比等は鎌足の子ではなく、天智天皇の落胤であるとの説がある。『大鏡』では天智天皇が妊娠中の鏡女王を鎌足に下げ渡す際、「生まれた子が男ならばそなたの子とし、女ならば朕のものとする」と言ったという伝説を伝える。『帝王編年記』『尊卑分脈』などの記載も同様である。

## 2、定慧

鎌足は、長男・定慧を唐に隠し、次男・史（ふひと）についても謀反を企てた母の実家に置いておくわけにもゆかず、山科にある田辺史(ふひと)大隅の邸に隠した。教育を受けるためにもうってつけなのだが、鎌足の妻、与志古娘の実家である車持氏とは同族で、元は毛野氏だと言われている。

不比等の養育を担った田辺史大隅の邸宅は、もともとは現在の大阪、河内飛鳥だったが、後に京都府の山科に移ったのであり、不比等が田辺氏に引き取られたのは、11歳の時であった。

一方、唐に留学した兄の定慧が23歳で帰国し、数ヶ月の後急死したとされる。このとき不比等は7歳であった。突然父から引き離され、長く別れて居た兄と漸く会えたかと思ったら、数ヶ月で逝ってしまったわけです。

しかし、唐から帰国したのが、本物の定慧であるかどうか疑わしいという説がある。なにしろ11歳の少年の頃しか誰も定慧を知らないのだから、鎌足がみすみす息子を死なせるようなへまをする筈がないというのである。

奈良に聖林寺という真言宗室生寺派の寺がある。多武峰に近く、眼下に卑弥呼の墓ではないかと言われている箸墓古墳を見下ろす位置にある。その聖林寺のホームページにもあるように、この寺の歴史には分からないことが多い。「多武峯二十六勝志に見るようにこの寺は談山・妙楽寺（現在の談山神社）の支院の一つであり、藤原定慧を開基としている。」とある。不思議な事に、この寺の創建年は712年なので、多武峯二十六勝志によれば定慧はその頃も生きていたことになる。

『元亨釈書』や大念寺の寺伝『大織冠縁起』によれば、和銅1年(西暦708)年に帰国し、留学中の夢のお告げに従って藤原鎌足の遺骸を摂津国阿威山から奈良県が多武峰（とうのみね）に寺院を建立して墓所を改葬したとある。そして和銅7年（西暦714年）に70歳で亡くなったとある。

このようなこともあって、実は、定慧は死んではいなかったという説が根強くある。作家の陳舜臣も、そう考える一人のようで、定慧をモデルとしているとしか思えない小説があります。中公文庫から出版されている「長安日記」である。賀望東という日本人留学生を主人公とする、唐を舞台としたミステリー小説である。小説の中で定慧は「自分は何故ここにいるのだろう」と疑問を抱いている。

定慧はきっと生きていたに違いない。当時、鎌足にとって唯一の嫡子であり、まだ不比等が影も形もなかったその時に、息子を守る為に唐に留学させたのである。生きて帰って来れないかも知れない危険な遣唐使船に大事な跡継ぎを乗せなければならなかった鎌足の思いからすると、先にも述べたように、鎌足が大事な息子をまざまざ死なせるわけがない。

私は、定慧は生きて藤原不比等の補佐をしたと思う。定慧は11歳から23歳まで留学僧として唐で生活をしていたので、当然中国語は堪能だった筈だし、藤原不比等としては力強い身内であったに違いない。

## 第2節 藤原不比等の経歴

中臣金をはじめとする中臣鎌足一族の有力者が近江朝の要人として処罰を受けたこともあって、天武朝の初期には、中臣一族は朝廷の中枢から一掃された形となっており、中臣連大嶋（なかとみのむらじおおしま）以外、これといった人物は見あたらない。

有力な後ろ盾を持たない不比等は、大舎人の登用制度によって出仕して下級官人からの立身を余儀なくされたと考えられている。大舎人は**内舎人**（うどねり）と対になっており、天皇に供奉して宿直や様々な雑用をこなした。そのため、何かと繁雑な役所に出向することも多かったが、大舎人は官吏の養成段階としてよく機能していた。不比等21歳の頃のことであると思われるが、記録がないので、その頃の様子はよくわかっていない。

『日本書紀』に不比等の名前が出るのは持統天皇3年（689年）に判事に任命されたのが初出で、持統天皇所生である草壁皇子に仕えていた縁と法律や文筆の才によって登用されたと考えられている。不比等29歳の時である。持統天皇と藤原不比等の仲立ちをしたのが、県犬養三千代（あがたいぬかいのみちよ）だったとされている。県犬養三千代は、草壁皇子の後となった阿閉皇女（あへのひめみこ）（後の元明天皇）が生んだ軽皇子（かろのみこ）の乳母だった。後に持統天皇にも気に入られて宮廷内で絶大な権力を握るようになった女性である。

判事とは、刑部省（ぎょうぶしょう）の役人のことだが、刑部省とは、古代日本における律令制下の八省の一つ。主な職掌は、司法全般を管轄し重大事件の裁判・監獄の管理・刑罰を執行することである。不比等の冠位は直広肆（じきこうし。従五位下相当）であった。直広肆というのは、天武天皇が制定した冠位48階制における16番目の冠位であるので、相当の高官である。

草壁皇子は、天智天皇元年（662年）に誕生。天武天皇元年（672年）、壬申の乱が勃発すると大津皇子ら他の兄弟達と共に両親に同伴する。天武天皇8年（679年）には吉野の盟約で事実上の後継者となり、天武天皇10年（681年）に立太子。おそらく、母の鸕野讃良皇后の身分の高さと、既に彼女の姉の大田皇女が死去している事から、大田皇女の息子である大津皇子を押さえ皇太子になったものと思われる。鸕野讃良は草壁皇子の皇位継承を強く望んでいたため、草壁皇子の皇位継承を実現するために、鸕野讃良が藤原不比等の協力を要請したと言われている。



このように、鸕野讃良の要請によって、不比等は、従兄弟の[中臣大嶋](#)とともに草壁皇子に仕えたとみられている。東大寺正倉院の宝物として『国家珍宝帳』に記載されている「黒作懸佩刀」は草壁皇子から不比等に授けられた皇子の護り刀で、後に皇子と不比等自身の共通の孫である聖武天皇に譲られたと伝えられているが、これは、鸕野讃良ならびに草壁皇子が藤原不比等に絶大な信頼を寄せていたことの一つの証拠といえよう。

朱鳥元年（686年）7月には重態に陥った天武天皇から母と共に草壁皇子は大権を委任され、9月には天武天皇が崩御する。翌月には謀反の罪で天津皇子が処刑される。だが、鸕野讃良皇后は皇子を直ちに即位させる事はしなかった。皇子の若さと天津皇子処刑に対する宮廷内の反感が皇子の即位の障害となったものと思われる。

草壁皇子は皇位に就くことなく持統天皇3年（689年）に薨去。草壁皇子の正妃は阿閉皇女（あへのひめみこ）である。彼女と草壁皇子の間に生まれた息子・軽皇子がのちに即位して文武天皇であるが、それには藤原不比等の陰の力があつたらしい。

文武元年（697年）には持統天皇の譲位により即位した草壁皇子の息子・軽皇子（文武天皇）の擁立に功績があり、更に大宝律令編纂において中心的な役割を果たしたことで、藤原不比等は政治の表舞台に登場する。また、阿閉皇女（元明天皇）付き女官で持統末年頃に不比等と婚姻関係になったと考えられている橘三千代の力添えにより皇室との関係を深め、文武天皇の即位直後には娘の藤原宮子が文武天皇の夫人となり、藤原朝臣姓の名乗りが不比等の子孫に限定され、藤原氏=不比等家が成立している。

阿閉皇女（あへのひめみこ）は、慶雲4年（707年）4月には夫・草壁皇子の命日のため国忌に入ったが、直後の6月、息子の文武天皇が病に倒れ、25歳で崩御してしまった。残された孫の首（おびと）皇子（後の聖武天皇）はまだ幼かったため、中継ぎとして、初めて皇后を経ないで即位した。慶雲5年（708年）、武蔵国秩父（黒谷）より和銅が献じられたので和銅に改元し、和同開珎を鑄造させた。この和銅年間の初期は、宝律令を整備していく時代であったため、実務に長けていた藤原不比等を重用した。草壁皇子は藤原不比等に絶大な信頼を寄せていたので、妻の阿閉皇女（あへのひめみこ）はそのことを知っていて、元明天皇として即位してからも藤原不比等を頼りにしたのである。

元明天皇の即位後まもなく、空前規模の都城である平城京の建設が進められが、9年の歳月をかけて空前規模の都城・平城京が完成したのである。これらにより、天皇主権法治国家というか天皇を中心とした中央集権国家が誕生したのであるが、藤原不比等の功績は絶大なものがある。この平城京遷都は藤原不比等が中心となって行われたのである。



## 平城京の模型

([http://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou\\_geppou/2011\\_10/interview\\_01/interview\\_01.html](http://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2011_10/interview_01/interview_01.html)による)

和銅3年（710年）不比等は、平城京を完成させるとともに、藤原京にあった氏寺・厩坂寺（うまやさかであら）を平城京に移し興福寺と改めた。その後、[養老律令](#)の編纂作業に取りかかるが養老4年（720年）に施行を前に病死した。